

編集 後記

団塊の世代がすべて後期高齢者となった2025年を越え、2026年の立春を迎えました。日本の公衆衛生は今、予測された課題への「対応」から、超高齢・人口減少社会をいかに持続可能なものにするかという「実装」のフェーズへと移行しています。

本号には原著3篇、公衆衛生活動報告1篇、資料3篇の計7篇を掲載しました。疫学、実践、社会経済、産業保健と広範な領域を網羅し、現場の創意工夫から政策立案に資するエビデンスまで、多彩な知見が集結しています。

まず原著では、NIPPON DATA2010の10年間にわたる追跡調査に基づき、客観的指標から食塩・カリウム摂取状況を比較した論文が、「健康日本21（第三次）」推進に向けた重要な根拠を示しています。また、都市部高齢者のつながり観の分析は、個別の支援を超えた「つながりを感じられる地域づくり」の重要性を説き、パンデミック下で行われた電話支援技術の明文化は、行政保健師が培った暗黙知を共有知に変え、今後の健康危機管理における人材育成に資する知見を提供しています。

公衆衛生活動報告では、鳥取県でのアルコール等依存症家族への実態調査を紹介しています。家族の孤立や経済的困窮を浮き彫りにした本報告は、法律専門家や自治会組織と連携した新たな支援体制の構築へと繋がった貴重な実践例です。

資料の3篇も、今日的な課題を鋭く捉えています。子育て費用が18年間で約2,570万円に達する実態からはエビデンスに基づく政策立案（EBPM）の必要性を強調しており、職域における男性労働者（特に50～60代）の月経知識不足の現状では、女性が働きやすい職場環境づくりのための具体的な教育的介入の必要性を示唆しています。さらに特定健診受診率向上に向けた自治体の工夫を明文化した分析は、「暗黙知」を集約し、自治体の規模に応じた効果的な受診勧奨や医師会との連携のあり方を提案しています。いずれも現場での活用が期待される有用な資料です。

掲載された論文は、いずれもデータに基づく客観的分析と、公衆衛生の現場に即した実践的な示唆を併せ持つ「羅針盤」です。本誌では、次代を担う若手研究者や学生、そして日夜現場で課題に向き合う実践者の皆様からの投稿を強く期待いたします。日々の活動や試行錯誤を言語化して共有することは、公衆衛生実践の質を高める「好循環」の起点となります。2025年を通過点とし、皆様の知見がより確かなエビデンスの創出とそれに基づく公衆衛生の実践を生み出す力となるよう、活発なご投稿を心よりお待ちしております。

（有本 梓）

次号予告（第73巻・第3号）

総 説

日本国内での COVID-19 下水サーベイランスの
エラー要因および継続の実用性について
…………… 井上史也, 他

Original article

Cultural adaptation and psychometric assessment of
the Japanese version of the Treatment Satisfaction
Questionnaire for Medication (TSQM)
…………… Anzu YAKUSHIJI, et al

原 著

地域在住の労働力世代男女における夕食開始時
刻の規則性および就床時刻までの経過時間と
主観的睡眠の質との関連 …………… 加藤ちえ, 他
地域在住中高年者における家庭内孤立と精神的
健康：和光コホート研究を用いた横断分析
…………… 村山洋史, 他

資 料

本邦における公衆衛生看護の介入技術の体系化：
Intervention Wheel をふまえて …… 茂木りほ, 他
小児慢性特定疾病から指定難病への制度移行支
援に関して行政担当者が認識する実態と課題
…………… 三浦雅子, 他